

## 論文の内容の要旨

論文題目 性解放？ 女性解放？ ——性科学と清末民初期の中国におけるジェンダー

氏名 楊 力

本研究はジェンダーの視点を用いながら、20世紀初頭の中国で欧米の性科学がどのように受容されたのかという問題を考察するものである。近代に議論された性に関する言説の特徴を明らかにし、それが女性にとってどのような意味を持つのかということについても考える。

従来の研究では、19世紀から20世紀にかけての世紀転換期を中国における性規範の転機と見なし、新文化運動（1915-1919）が展開された1910年代後半に「性」の「近代」の起点が置かれることが多い。その根拠は、主に以下二点に求められてきた。

第一は、新文化運動期に中国の知識階級の間で起った性をめぐる公的な議論である。この議論は恋愛や婚姻の問題とも関連づけられ、新聞や雑誌で頻繁に取り上げられた。知識人たちが前近代社会における性規範を厳しく糾弾したことは、新たな性規範を模索する過程として見逃せない。第二は、中国におけるジェンダー秩序の転換である。この時期に起ったジェンダー秩序の変革として、女性の性をめぐる議論が女性の社会的束縛からの解放、通称「女性解放」を訴える言説に含まれるようになったことが注目される。とりわけ注目されるのは、女性の性欲が、女性個人の社会的権利や社会的解放にかかわる問題として重視されるようになったことである。

以上二点は、新文化運動期に論議された性に関する言説の特徴ということが出来る。特に第二点は、女性の性的解放の観点から評価されてきた歴史があり、これまでの研究では「常

識」と見なされている。確かに、新文化運動期に女性の性欲をめぐる言説が浮上したことは間違いない。女性の性欲問題を女性の解放や男女の平等にかかわる問題とする認識自体は新文化運動期に出来上がったものであり、今日にいたるまで中国人の考えを規定している。だが、これらの認識とそれを生みだした言説との関連については、先行研究では十分に吟味されていない。そこで本研究では、女性の性欲をめぐる言説が女性解放運動に結びつけられることになった歴史的背景を明らかにすることを目指す。具体的には、新文化運動期の知識人が女性の性欲をどのように語り、それがどのようにして女性の性を認識する枠組みに結びついたのかという問題を取り上げる。そして、女性に性欲の存在を認めることが、なぜ新文化運動期に社会的な意義を持ち得たのかという問題にも踏み込んでいきたい。

以上の問題を考えるにあたり、本研究で使用する史料は、世紀転換期に英語や日本語から中国語に翻訳された性科学書である。性科学を人々の考えに影響を与え、一種の規範を形成する力とみなすことによって、西洋および日本の性規範がどのように取捨選択され、中国に受容されたのか、考察する。まず、中国における性科学の受容史を整理する。そのうえで、人間の性をめぐる言説を、恋愛や婚姻との関係性を軸に考察する。さらに、女性の性をめぐる言説を分析するが、その際「女性に性欲がある」ことは人々にどう認識されたのか、女性は性行動においてどのような役割を分担されたのか、という問題意識のもとで考察する。

本研究は二部五章の構成をとる。第一部では清末(1901-1918)、第二部では中華民国初期(=新文化運動期、1918-1927)に刊行された性科学書を考察する。

第一章「強国保種をめぐる——清末の性科学と「性」」では、清末以前の性をめぐる言説を中国伝統性学の領域において考察する。そして、性科学が中国に伝来した歴史を概観したうえで、清末の知識人の性科学に対する態度を考察する。以上の内容を踏まえ、清末に翻訳され、出版された性科学書を通して「近代的性規範」を検証する。ここでは、テキストの内容面だけでなく、性科学書が出版された背景や、販売される際の宣伝のされ方とその読まれ方をも検討の対象とする。

第二章「「女性に性欲はない」のか?——清末における「性」とジェンダー」では、清末の性科学書における女性の性欲に関する言説に焦点を絞り、テキストの翻訳研究を通して、英米で性科学を通して構築されたジェンダーがどのような取捨選択を経て清末中国に伝わったのかという問題を検討する。中国の問題を考えるのに先駆けて、まずは外国の状況を整理する。外国の状況として、19世紀の英米における女性の性的欲求に関する科学的言説を考察したうえで、明治時期の日本で出版された性科学書に表された女性の性的欲求をめぐる言説を紹介する。これらの考察の後、清末中国の知識人が英米および日本といった外国の文献を翻訳する作業を通して、女性の性欲をめぐる海外の言説をどのように取り入れたか具体的に検証する。

第三章「礼教」から「科学」へ——新文化運動期の性科学と「性」では、新文化運動期の性に関する言説を広く取りあげる。この時期には、性科学の学説は性科学書だけでなく、多くの媒体を通して社会に広く浸透した。その普及ぶりを概観したうえで、性科学がどのように利用され、社会においてどのように位置づけられたのかという問題を検討する。本章ではさらに、新文化運動期において、女性の性欲にはどのような社会意義が付与されるかを考察する。とりわけ、女性の性欲はジェンダー秩序の変革につながり、「女性に性欲がある」と考えることが女性を一人の独立した個人を見なし、社会的権利を認めて彼女たちを束縛していた旧弊な規範から解放することにつながる重要な問題であるという認識がどのように生まれたのか、その背景を検討する。

第四章「女性にも性欲はある」のか？——新文化運動期における「性」とジェンダー(一)」では、第三章の内容からさらに踏み込んで、新文化運動期の中国人知識人の性科学言説の受容について考える。中国で性科学の知識が広まるにつれて、当時の知識人は「性」に関するどのような点で「伝統」を批判し、新しいジェンダー秩序のどのような点を強調したのだろうか。伝統批判と新秩序の特徴を並べてみることで、性科学を根拠として女性の性欲を認め、その容認が女性の解放につながるという認識が新文化運動期に創出されたことがわかる。

第五章「独身女性は「性抑圧」か？——新文化運動期における「性」とジェンダー(二)」では、新文化運動期における性欲についての言説では、科学的な知見に基づいて女性の性欲を全面的に肯定し、女性にも男性同等に性的な快楽を追求する権利を認めることとなったという前章の分析結果を踏まえ、独身女性の性を取り上げる。新文化運動期の中国では、独身女性は性欲が満たされないと想定され、社会的な糾弾の対象となった。本章では大正時期の日本と比較することを通して、当時の中国社会の特徴が明らかにされる。具体的には、大正期の日本で活躍していた性科学者の田中香涯(1874-1944)の性理論について、中国での受容状況を概観する。その上で、魯迅(1881-1936)による「寡婦主義」における独身女性批判と、そこに見られる田中の思想の影響を考察する。

以上本論の五章の議論を踏まえた結論は、次のとおりである。

まず、20世紀初頭の中国にみられる性的な領域における「近代」の特徴は、性の国民国家イデオロギーへの編入と、性と愛と結婚という三位一体の近代的性規範があげられる。清末における性科学的言説では、人々の性は生殖の手段として「国民国家」イデオロギーに組み込まれたのであり、その意味の範囲内において重要視されたが、新文化運動期には、性欲と生殖を概念の次元で切り離し、性欲を個人が快楽を追求する手段として肯定するという新たな立場も出現した。また、清末では、肉体的関係である性は精神的行為である愛の下位に置かれていた。性は愛情に基づく婚姻に限定されており、性の正当性は婚姻関係の中にお

いてのみ認められていたが、新文化運動期に入って性愛や恋愛の概念が流通するようになると、性の正当性を判断する基準が婚姻から恋愛へと移り、性行為を通して性的な満足が得られるかどうかを愛を判断する基準となる。

そして、性的な領域における「近代」が女性にとっての意味は、次の二点から考えられる。第一、女性の性欲は社会問題となり、「女性に性欲がある」と認めることは性的な領域における「女性解放」の基準とされたことである。新文化運動期以前の中国では、女性に性欲が備わっていることは自明であったが、新文化運動期になると、女性の性欲を認める立場を取ること社会意義が付与されるようになり、これが性的な領域における「女性解放」の基準と見なされるようになる。しかし、女性に性欲を認めるか否かを「女性解放」の基準と捉える見方は、新文化運動期の知識人たちが性科学に支えられた欧米の「女性解放」言説を取り入れた結果、作り上げられた認識の構図である。第二、性行動において、女性は主体的でありながら受動的であるという男女の非対称性をめぐる言説が出現したことである。中国伝統性学では男女が一对となり、相補的あるいは敵対する相手との見方が取られていたが、性行動を行う頻度や時期を選ぶ権利は男性が持つよう説かれていた。一方で新文化運動期になると、欧米の性科学が唱えてきた性行動における女性が時期と頻度を選ぶ主体性と、性欲における男性は能動的、女性は受動的という非対称性の言説が同時に出現した。